
仙禽
-SENKIN-
1400HR

目次

キャラクター紹介　３ページ
あの日夢見た海に　４～１７ページ
悪魔に恋しちゃダメですか？　１８～２２ページ
春色コンダクト　２３～３３ページ
あとがき　３４ページ

あの日夢見た海に


あげは


しろ


るり

悪魔に恋しちゃダメですか？


りり


ゆうと


さき

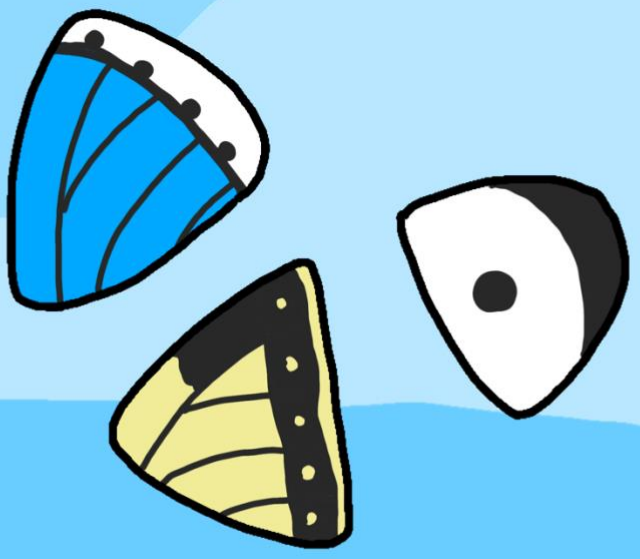

あきと

春色コンダクト


はると


はるか

あの日
夢見た海に



ぼくたちがまだ小さい幼虫だった頃、ぼく――あげはと、しろと、るりは、約束した。

「木の上から遠くに見た海を、いつか、ぼくたちが成虫になったら一緒に見よう」って。

ぼくは、「ぜーったい、一緒に、あの海を見に行こうね！ぼくたち三人の約束だよ！」って言って、しろは、「わたし、最近太ってきちゃって…成虫になるまでに痩せなきゃ！あと、運動不足みたいだから、遠くまで飛べるように、今のうちに体力つけなきゃだね！」って言って、るりは、「じゃあ、おれは最初に成虫になって二人のこと待っててやるよ！安心して、ゆっくり成虫になりな！」って言って。

そうやって、三人でゆびきりげんまんをしたりして、笑い合って。

ぼくたちは蛹になる直前まで、そんなことを言い続けていた。そして、深い眠りにつく。

三人で一緒に、あの海に行く日を夢見て。

―あげは、しろ、ごめんな。

そんな声が聞こえた気がした。はっとして目を覚ますと、そこはまだ繭の中で、近くには誰の気配もない。るりの声が聞こえたような…気のせいだったのかな。

そう思いながら、自分の手を見る。ちゃんと成虫になれたようだ。ぼくはそれを確認すると、蝶として繭から出る準備を始めた。もう一度、周りに誰もいないことをしっかりと確認して、ゆっくり繭を出る。

隣を見ると、るりの繭はもう破れていた。しろの繭はまだ破れていない。どうやら、るりは、本当に最初に出たらしい。

どこにいるのかな。もしかしたら、もう美味しい蜜のある花畑なんかを見つけているのかもしれない。きっとるりはあとで戻ってくるから、その時に聞いてみよう。昨日どころかさっきまで蛹だったぼくが成虫になってるんだから、驚くよね。そうだ、るりが戻ってくるまで

に飛べるようになって、もっと驚かせようかな。

そう考えながら羽を少しずつ広げる。先輩蝶から聞いた情報によると、羽を広げ終わるまでは1時間から1時間半くらいかかるらしい。まだしばらくかかりそうだから、この間に、どうやって海へ行くかでも考えていようか。

しばらくたって、ぼくは羽を広げ終わった。試しに少し飛んでみたけど、すごく楽しい！今なら、幼虫の時には行けなかったとこでも、どこにでも行けそうだ！早くるりにも見せたいな。…るり、いつ戻ってくるのかな。るりは方向感覚がいい方だから、迷ったってことはない気がする。うん、少し心配だし、探しに行こうかな。

繭があった木の近くを飛んでみると、青色の羽のかけらのようなものを見つけた。

ここは森だから、もちろん、ぼくたち以外の生物もたくさんいる。でも、なんだか胸騒ぎが

した。いつだったか、るりが、「おれは、成虫になったら綺麗な瑠璃色の羽になるんだってさ。だから、名前がるりなんだよ」って言っていた。まさか、るりの羽？

怖いけど、確かめなきゃ。この羽がるりのものであっても、るりのものでなくても、手がかりはこれしかないんだから。

「るりー、どこー？」

るりを呼びながら羽が落ちていた近くを飛ぶ。すると、また、同じようなものを見つけた。羽は、森の奥へ、一本の道のように一定の間隔を保って落ちている。

その羽を辿っていくと、やがて、開けたところに出た。そこには、ボロボロになった瑠璃色の羽が落ちていた。ぼくがその羽を見ていると、近くから青虫が出てきて言った。

「きみ、その子のおともだち？」

「わからない。ぼくの友達にもこんな羽の子がいるんだけど、その子のなのか別の子のなのか、これだけじゃわからないんだ」

ぼくがそう返すと、青虫は言った。

「じゃあ、いちおう言っておくね。その子ね、向こうからたくさんの蜂に追いかけられてここに来たんだよ。がんばって逃げてたけど、捕まっちゃって…。えっと、たしか…『あげは、しろ、ごめんな』って、さいごに言ってた。」

間違いない。これは、るりだ。ぼくが繭の中で聞いたるりの声は幻聴なんかじゃなくて、本当にるりが言っていたんだ。

ぼくは、落ちている、るりの羽をかき集めた。るりはもう蜂に捕まってしまったけど、せめて、るりの羽のかけらだけでも海に連れて行きたい。

ぼくはるりの羽を集め終わると、教えてくれた青虫にお礼を言って、繭のあるところへ戻っ

た。幸い、しろはまだ羽化していないようだった。しろが羽化して、飛べるようになったら、ちゃんと言わなきゃ。

るりの羽を近くの木の根元に隠して、しろの近くの隠れられそうな大きな葉の下で眠る。

明日、起きたらるりがいたりしないかな、なんて馬鹿なことを考えながら。

なんだろう。何かの音がする。まるで鳥の羽撃く音のような……鳥？まさか…！

ぼくは飛び起きた。辺りはまだ薄暗い。葉の下から顔を少し出して、音のする方を見ると…しろの近くで、一羽の鳥が飛んでいた。その目はしっかりとしろを捉えている。今のしろは蛹だから、動けない。

「…ぼくが守らなきゃ」

そう呟くと、ぼくは鳥のすぐ近くに行った。鳥はぼくに気づくと、ぼくのことを捕まえよう

とした。ぼくはそれを避けて、しろが見えない場所まで行く。鳥は、そんなぼくを追いかける。

そんなことをしばらくしていると、やがて、鳥はぼくを見失ったのか、どこかへ飛んでいった。しろは無事みたいだ。

しろを守るために咄嗟にやってしまったけど、すごく怖かった。そりゃあそうだ、命懸けだったわけだから。

「るりも、こんな風にぼくらのことを守ってくれてたのかな…」

きっとそうだ。ぼくらが安心して羽化できるように守ってくれてたんだ。ぼくも、しろが安心して羽化できるように頑張らなきゃ。

その後も、何度か鳥が来た。ぼくはひたすら飛んで、鳥がしろを食べないようにした。

夜、ぼくが寝ようと準備していると、しろが少し動いた。
もしかしたら、明日には羽化するのかもしれない。今日は早めに寝ておこう。
「おやすみ、しろ」
ぼくは呟いて、昨日と同じように眠りについた。

その日、ぼくは夢を見た。夢の中ではぼくたち三人が成虫になって、一緒に海へ向かって飛んでいた。
「ごめんな、あげは、しろ」
るりがそう言って、落ちていく。少し遅れて、しろも落ちていく。二人の体は、落ちながらバラバラになっていく。
「二人とも…っ」

そう言ったぼくの羽も、片方がなくなる。バランスを崩したぼくも落ちていく。
そして、ぼくたち三人は、暗い闇の中に落ちていった。

「るり、しろ…！」

急いで目を覚ます。さっきのは、夢？しろの方を見ると、まだ羽化はしていないが、確かにそこにいる。こないだ隠したところに、るりの羽もあった。
それを確認すると、ぼくはゆっくりと深呼吸した。
その時、しろが動いた。しろが、羽化しようとしている！近くに誰もいないことを確認してから、ぼくは少し離れたところで見守る。
やがて、しろの繭が破れ、しろが……とはならなかった。繭は破れたが、どこか様子がおかしい。しろの羽が破れたところから落ちていった。隙間から見た繭の中には、しろは、いな

かった。代わりに、何かの幼虫がいっぱいいた。やがてそいつらは、糸を吐きながらしろの繭から降りていく。全員が繭から出ていったことを確認してから、ぼくは、繭の中を見た。

そこには何もなかった。

小さい頃に聞いたことがある。幼虫に寄生するハエがいると。きっと、こいつらはその寄生するハエなんだろう。

そう理解した途端に、怒りが込み上げてきた。怒りのままハエの幼虫たちを追いかけようとしたが、ぼくはそこで止まった。

ハエたちを追いかけたところで、一体、何が起きるというのだろう。もう、しろはこいつらに食べられて、どこにもいないのに。

ぼくは、しろの羽を拾った。木の根元に隠したるりの羽も回収する。

「しろ、るり。一緒に海を見に行こう」

二人の羽を抱えて、ぼくは飛んでいく。いつか一緒に行こうと約束した海に向かって。

もうどれくらい飛んでいるだろう。かなり疲れているから、長い間飛んでいることだけはわかる。でも、今はぼくの疲れなんてどうでもいい。少しでも早く、三人で海を見たい。

「!!」

背中に衝撃が走る。振り返ると、ぼくの後ろには鳥がいた。もう一度、鳥がぶつかってくる。その衝撃で、二人の羽が落ちてしまった。逃げなきゃいけないことは、頭ではわかってる。でも、ぼくは、二人の羽を追いかけた。

そんなぼくを見てチャンスと思ったのか、鳥はぼくの羽に攻撃してきた。ぼくの羽が片方、取れた。バランスを崩したぼくは、二人の羽を掴んだまま落ちていった―。

高いところから落ちたぼくだったけれど、幸いにも、特に大きな怪我はなかった。ただ、鳥に取られてしまったため、羽は片方しか残っていない。

しろもるりもいない状況では、飛べないぼくが生きていくことはできないだろう。

「二人とも…海に連れて行けなくてごめん」

それだけ言うと、ぼくは二人の羽をしっかりと抱えて、横になった。

すでにだいぶお腹が空いているし、喉も乾いてる。何か食べないとどうなるかはわかっていたけど、別にそれでもいいと思った。しろもるりもいない、さらに海に行くこともできないのなら、このままでいい。

本格的に疲れてきたので目を閉じると、上の方から音がした。見ると、さっきの鳥がいた。

ぼくのことを追って来たんだろう。鳥がぼくのすぐ近くに来ても、ぼくは動かなかった。

そのまま、鳥が口を開けるのを、ただぼんやりと眺めていた。

鳥は飛んでいく。海の上を。その鳥の口から、三つの小さな羽のかけらが落ちる。
それは、三匹の蝶の羽だった。

綺麗な海に、三枚の蝶の羽のかけらが落ちていく。
あの日夢見た海に、色違いの羽がまるで寄り添い合うように、一緒に落ちていった。


2話!
悪魔に
恋しちゃダメですか?

放課後。私たちは優斗くんに昼休みの続きの説明をしていた。

「あ、あたし部活行ってくるね」

「俺も部活行ってくる」

えっ。まさかの、私と優斗くん、二人きり…？

「りりちゃんは、部活入ってる？」

「うん。美術部に入ってるよ。美術部は活動、水曜日と金曜日だから今日はないの」

確か咲希は吹奏楽部で、暁人くんは陸上部だったかな。

「部活かぁ～。ねぇ、美術部って、どんな感じ？」

どんな感じか、って言われると…難しいけど…

「みんなで色々話しながら絵とかの作品を作ってる…って感じかな…？」

「楽しそう！部活って、体験とかできるかな？」

「うーん、どうだろ…明日先生に聞いてみる？」

私が言うと、優斗くんは元気に頷いた。

「うん！明日、二人にも話してみるね！」

「そうだね」

「じゃあ、また明日！」

優斗くんはそう言って少し大きめに手を振ってくれた。私も手を振り返して帰る。

「先生！あの、昨日来た転入生が美術部の体験したいって言ってて…」

私が話すと、先生は笑顔で、

「明日の部活おいで！って言っといて！」と言ってくれた。

「あ、優斗くん、おはよう」

「おはよ！」

「さっき聞いたら、明日の部活おいで、だって」

私が言うと優斗くんは目を輝かせて言った。

「ほんと！？やったぁ～明日、楽しみだね！あ、咲希ちゃんと暁人くん来たから、聞いてくる！」

「あ、優斗だ！おはよ～」

「優斗おはよー」

良かった、無事に部活動体験できるか聞けてそう。それにしても、もう三人、こんなに仲良くなったんだなぁ…まあ、咲希はもとから誰とでもすぐ仲良くなれる性格だし、暁人くんも優斗くんと趣味が同じみたいだし、当たり前といえば当たり前…なのかも？

そんなことを考えていたら、突然咲希が私の方を向いて言った。

「優斗、りりの部活にも行くって言ってた？」

「うん。今日顧問の先生の許可も得たから、明日来るって」

「え～いいじゃん！あたしも休み時間に聞いてこよ！」

咲希ってば、今すぐにでも先生に聞きに行きそう。思いついたらすぐに行動できるのは、咲希のいいところだよね。

そうこうしているうちに、もうすぐ授業が始まる。明日の部活は優斗くんが来る。…いつもよりも、さらに楽しい部活になりそう！


春色コーダクト

4月4日、日曜日。春奏が…私の妹が、亡くなった。あと10日で誕生日だった。

「春音」

名前を呼ばれる。ドアを開けると、お母さんとお父さんがいた。目が赤いから、さっきまで泣いていたのだろうか。

「春音、その…大丈夫か？」

お父さんが尋ねる。大丈夫なわけはない。最愛の妹を亡くしたばかりだから。かといって、あまり両親に心配もかけられない。

「…うん。お父さんとお母さんも、大丈夫？」

「まだ大丈夫ではなけど…たくさん泣いたからかな、昨日よりは平気そう」

昨日、私たちは春奏の葬式を行なった。お父さんとお母さん、そして親戚の人たちはみんな

泣いていた。その中で、私だけは泣いていなかった。悲しくないわけではない。ただ、春奏がいなくなったというのが信じられないというか…信じたくないのかもしれない。泣いたら、春奏はもういないと認めてしまうような気がして。

「明日は入学式だっけ？」

「うん。朝は九時登校だって今日言ってた。」

「そっか…春音も、早めに寝てね…おやすみ」

「おやすみ」

私が答えると、両親はそっとドアを閉じた。私は棚の上に置いてある花の飾りのついたヘアピンを見つめ、ベッドに倒れ込んだ。そしてゆっくりと瞼を閉じる。いつの間にか眠りについていた。

アラームの音で目を覚ます。時計を見ると、六時だった。今日はもう少し遅く起きても平気だったのに…設定をそのままにして寝たのか。二度寝して起きられなくなるのも怖いので、少し早いけど準備をすることにした。

すると、メッセージが届く。合唱部の顧問からだ。

「今日の練習場所が、視聴覚室に変更になりました。入学式が終わったらお昼を持って来てください。他の部員にも共有お願いします」

ああ、そうだ。明日は放課後に部活がある。来週のミニコンサートの練習をするとか言ってたかな。

「今日の部活は視聴覚室に変更になりました」

それだけを合唱部員たちに送った。…今日の部活、どうしようか。一週間後にミニコンサートが迫っている中、欠席するのは避けたい。特に私は指揮者だから、休んでしまうとかなり

迷惑がかかるだろう。でも、合唱部には、春奏もいた。治療の影響で声が出にくくなっていたからやめた方がいいとみんな言っていたが、それでもやりたいと言って…前より声が低くなったから、パートをテノールに変えてたな。家でも、「ハモりたいから、お兄ちゃんソプラノ歌って」とよく言われたな。おかげで声がすっかり高くなってしまった。見た目がそっくりだったのもあり、「話してる人が逆に見える」と言われたこともあったな。

そこまで考えて、ふと、棚の上のヘアピンを髪に当てて鏡を見てみる。

「よくそっくりって言われたけど…あんまり似てないな…」

春奏が隣にいた頃はそっくりに見えていたのに。

「あっ、時間！準備しないと遅刻する！」

いつもより少し大きめの声で言って、無理やり気持ちを切り替える。

その声も、やっぱり春奏の声とは似ていなかった。

入学式の後。視聴覚室のドアを開けると、すでにみんな集まっていた。

「今日は一旦来週のミニコンサートの話をしてから昼休憩、そのあとに練習にしよう」

顧問の先生がそう言って、ホワイトボード用ペンを取り出した。

「まず、ミニコンサートをやる日は１４日…の予定だったんだが、その日は吹奏楽部のコンサートになったので、合唱部は翌日、１５日の昼休みに変更となった」

え…。１４日ではなくなった？１４日は、春奏の誕生日だったのに…その日に演奏できるねって、春奏とも話していたのに…。

「先生、１４日に戻せないんですか？」

部員の一人が言う。

「中庭で演奏するから、雨予報ではない１４日にしか吹奏楽部ができないそうで…。合唱部は渡り廊下でもできるから、と」

「そんなの中庭以外でよくないですか!?」

「中庭以外だと一年生の教室に届かないから良くないとのことだ」

もともと、この時期のミニコンサートは一年生の勧誘も兼ねている。それは吹奏楽部も同じなのだろう。仕方がないことだ。それは分かってはいる。

「…先生。本当に、戻せないんですか？」

少しの可能性に縋って、聞いてみる。

「吹奏楽部と話し合ってみれば、できる可能性もあるが…」

それでもいい。たった1%でも、可能性があるのなら。

「吹奏楽部って、今日、活動ありますよね？話してきます」

「えっ。お、おい、志木！？」

先生は驚いてるけど、構わない。

「…先輩…そうですよね…そうですよね！俺らも行きます！」

「僕も！」

「うちも！」

後輩達も来てくれた。

「みんなで、ミニコンサートを元の日にしよう！」

おー！と、みんなで手を挙げる。今の自分たちなら、なんでもできるような気がした。

「結論から言うと、それは難しいかな」

吹奏楽部の先生に話したが、ダメだった。

「日にちを変えるときも言ったんだけど、晴れてるのってその日しかないんだよね。で、雨が降っちゃうと吹奏楽部は演奏ができないから、この日しかできないっていうこと。」

それは分かっているけど。

「合唱部は、最悪雨降ったら渡り廊下でできるでしょ？途中で降っても、ピアノだけ運べば平気だし。」

その通りだけど。でも、そうじゃない。

「だから、悪いけど変えるのは…」

「違います」

気がついたらそう言っていた。

「何が違うの？」

先生はきょとんとしている。そりゃあそうだ。この先生は私と春奏のことを知らないから。

「私は、晴れている日がいいんじゃなくて、１４日がいいんです」

先生がなぜ？という顔をしている。

「たとえ大雨だったとしても、１４日がいい。１４日は、私の妹の誕生日なんです」

「それは…おめでとう。でも、そのこととなんの関係が…」

…学校って、生徒に何かあったとき、全先生に共有するわけじゃないんだな…。

「…それ、は…」

私が言いづらそうにしていると、後輩の一人が言った。

「先生、もう、やめてあげてください。先輩には、その日でなくてはならない理由があるんです。そして、俺らもそれに賛成しているんです」

「そうです！お願いします、ミニコンサートの日を元に戻してください！」

私たちの必死の訴えも虚しく、ダメと再度言われてしまった。

「おかえり、どうだった…って、なんか暗いな。ダメだったか？」

「はい…」

「…志木の気持ちは分かるよ。１４日がいい理由、妹の誕生日だから、だろう？」

その言葉に、私はぱっと顔を上げる。やっぱり、顧問の、私たち兄妹を知っている先生は分かってくれていた。

「そうだよな。うん…よし！こっちの方で、１４日に戻せないか聞いてみるよ。」

「本当に…？」

「ああ。生徒たちがこんなになんとかて戻そうとしているんだ。先生が動かなくてどうする！」

「先生…！」

良かった…。先生が言ってくれるなら、少しは日にちを戻せる可能性も上がるだろう。

「それじゃあ、一旦昼ご飯を食べたら、ミニコンサートの練習をしよう。１時間後くらいに戻るよ」

あとがき

ここまで読んでくださりありがとうございました！

書き終わらなかったため、「ブラコン少女をおとしたい！」はお休みします。

ここだけの話ですが、この第二号は「あの日夢見た海に」と「春色コンダクト」のキャラを紹介するために大急ぎで作りました。

ちなみに、文芸同好会の人たちの間では、作品を略称で読んでいます。「ブラコン少女をおとしたい！」は「ブラコン少女」、「悪魔に恋しちゃダメですか？」は「あくこい」、「あの日夢見た海に」は「ゆめうみ」、「春色コンダクト」は「春コン」、「堕天使ちゃんの休息講座」は「だてきゅう」、「インドア姉弟の日本旅行」は「してりょこ」と呼んでいます。

次回はハロウィン特別号の予定です！どの話が載るかはお楽しみに！

感想は…話せそうなら本人に言ってくれるとかなり喜びます。